

付録 その1

なんや、そういうテクか！

～授業で気をつけているポイントをご紹介します～



山下広樹

教育実習でほんの数回授業をただけ。
たまたま採用試験に合格しただけの、そんな自分が生徒の前に立つ。
そして授業を担当する。

最初のうちこそ、それなりに準備して必死のパッチでやっていた。
しかしいつの頃からか、「まあ、これくらいでええやろ」と手抜きを覚えた。

そこからは墮落の一途。
毎日毎日、同じ作業の繰り返し。
担当する生徒こそ、1年ごとに変わるとはいえ、やってる内容はほぼ同じ。
惰性に陥った。

いま思えば、先輩の先生のありがたいひと言で、運命は変わった。
人間、切羽詰まったら、頑張れるもの。

必死になって学ぶと、「学ぶ」ことの面白さを思い出した。
そう。
自分は「学ぶ」ことが好きだから、教師になった。
「学ぶ」ことの大切さを伝えたいから、教師になった。

自分の背中を見て、生徒は育つ。
ならば、自らが学び続ける人であってこそ、生徒のモデルになれる。

シンプルな話でした。
多くの先生方に教えていただいて、現在の自分があります。
自分が教わったことを、あとにつづく人たちに伝えていければ幸いです。

授業が変われば生徒は変わる。自分が変われば必ず生徒は変わる。

指導技術について

【大前提】

「何のために」自分の教科を教えるのか。

「何のために」授業をするのか。

そもそも「何のために」自分は教師をしているのか。

→(目的の無い教育活動は、生徒も目的を持たない)

生徒をリスペクトしているか

→(教師は「教える役割」を担当しているだけ。人間としては完全に平等)

→(自分が生徒を尊重する。生徒も自分を尊重する。自分が先、生徒は後。Respect Each Other)

→(最もわかりやすい行動は「挨拶」)

教科を通じて、自分は生徒たちに何を伝えるのか

→(自分の中に志(芯となるもの)が無ければ、惰性に陥る)

生徒にとって、教師は親の次に最も身近な大人

→(大人がつまらなそうに仕事をしていたら、子どもは仕事に夢を持たなくなる。大人が仕事の愚痴をこぼしているのを見て、子どもは仕事はつまらないものだと思い込む)

→(カラ元気でいい。生徒の前では、元気で明るく、仕事を楽しむ大人を演じたい)

【進め方】

最も大切なのは、生徒の集中力

- (そのための話し方。一本調子にならないような工夫)
- (生徒が集中力を失う最大の原因は「聞き取れない」)
- (大声の一本調子にも注意)

生徒は視点の変化、姿勢の変化で集中を取り戻す

- (教師、黒板、ペアの生徒、グループ内の生徒、指名された生徒、スクリーン、動画、教師の動作、黒板に書く絵、など)

集中力の限界は 15 分。実際は 10 分程度

- (1 人称の視点「自分が生徒だったら」を持てているか)
- (どんなふうに進めれば、集中力を高められるか。想像する。PACD)

集中力を保てるような「授業デザイン」を

- (「学習指導案」はやはり大切。研究授業のような本格的なものは不要だが、自分でタイムスケジュールを予め組んでおくことは必要)
- (書いたものがあるから、振り返りができる)

授業デザインの例

- ①本日の流れ(見通しを持たせる)
- ②最初の活動(英語に慣れる活動)
- ③メイン(説明はあくまでも簡潔に)
- ④定着活動(説明で終わってしまわないように)
- ⑤まとめ(リフレクションなど)

【話しかた・指示のしかた】

1対1を40(クラス的人数分)積み重ねる

- (1対40の話し方ではなく、1対1で2秒ずつ目を合わせる)
- (10人程度なら、全員と目を合わせていく)
- (人数が多いときは、ブロックごとに区切ってその中の1人と目を合わせる。標準的な教室の場合、窓側前、窓側後ろ、中央前、中央後ろ、廊下側前、廊下側後ろ、と分ける)

「ラ・ポール」の形成

- (1人1人に目を合わせる)
- (対象の1人に言葉を送り届けるイメージ)
- (相手を包み込むように)

静かにさせたいなら、静かになるのを待ってから話す

- (「静かにしなさい」は悪手)
- (沈黙に自分自身が耐える訓練を)

具体的な動作を指示する

- ×(うるさい！静かにしなさい！話をやめなさい！プリントを出しなさい)
- (口を閉じます。私の方に体を向けます。OK。No.○の「○○」と書いてあるプリントを出します)

1文は短く。1つの文で1つの指示。

- ×(教科書出して、45ページ開けて、3番の問題を今から始めて、5分で解いてください。)
- (教科書を出します。45ページを開きます。今から3番の問題を解きます。制限時間は5分。では、始め)

最重要 無駄な言葉を削る

- (「えー」「あー」「ちょっと」「そのー」など、自分の口癖に注意)
- (生徒の集中力を削ぐ最大の原因は、教師の話しすぎ)
- (人の話を聞くのは基本的に「しんどいこと」だと認識する)
- (指示が分かりにくくて、生徒は混乱することが多い)

“SIMPLE” “SHORT” “CLEAR”

(指示の3原則)

生徒の名前を呼ぶ

- (名前を呼ばれた回数だけ、生徒はその先生を意識する)
- (生徒を当てて答えてくれたら、「ありがとう、〇〇さん！」)
- (挨拶にもレベルが。①「おはよう」 ②「おはよう、〇〇さん」 ③「おはよう、〇〇さん。今日もええ感じやね」)

生徒の良いところを見取る。具体的にコメントする

- (褒めることで教室の温度が上がる。指示や規律の徹底につながる)
- (「今のRの音は、舌を引っ込めた音が出ていました。素晴らしい」)
- (「今日は音読の音が、ふだんの2割増しで出てますね。めちやくちやいい。5割増し目指そうか！」)
- (「〇〇さんは、めっちゃ笑顔でパートナーの話を聴いてるよね。しかもいい。5割増し目指そうか！」)

話しが長いのは、絶対ダメ

- (その場の思いつきで話すのも、熱が伝わることもあるが、ごくまれ)
- (日本語で喋る時に、特に注意)
- (お説教をするときは、特に注意。無言の「間」をこそ大切にする)

【非言語メッセージ】

言葉以外で多くのことが伝わっている

→(沈黙、間、顔の向き、立ち位置、姿勢、表情、ジェスチャー、声のボリューム、声のトーン、緩急。特に表情が大きい)

絵、写真、動画、ジェスチャーの威力

→(下手な絵ほど生徒の印象に残る。教師のジェスチャーはさらに印象に残る。大切なのは、あくまでも生徒が集中すること)

生徒を伸ばすためにやっているのか、生徒に言うことを聞かせるためにやっているのか。それとも自分が気持ち良くなるためにやっているのか

→(生徒は敏感に見抜いている)

→(厳しさはときに優しさ)

教科の力がすべて

→(生徒の前で自信を持って振る舞えるかどうかは、自分の教科に対する圧倒的な知識量が大切)

→(たとえ今、教科の力が足りていなくても、日々努力し続けている姿勢は、体からにじみ出て、生徒に伝わる)

【その他】

教員は「喋り」が大きな要素。自分の喋りを磨いた方がよい

→(漫才、漫談、落語、アナウンサー、司会者、etc。プロはみんな練習している)

→(「喋り」を生業にしている人たちは、どんな練習をしているか学ぶ)

教科の力が伸びるように指導

→(そのためには圧倒的な英語力、実際に英語を学ぶ経験、苦勞して身につけた経験が大切。ちょっとした単語の知識や、トリビアなことは生徒の知的好奇心をくすぐる。また学習に取り組むコツも、折に触れ伝えと生徒は食いつく)

教師自身の学ぶ姿勢、学んだことの生徒へのフィードバック

→(教師自身が新しいことに挑戦する姿勢こそが、生徒に大きな影響を及ぼす)

→(たとえば ICT を授業で使ってみて、授業中にうまくいかないことがあっても。どんどんトライしようとする姿勢が、生徒のマインドセットに確実に良い影響を与える)

いま目の前で生徒が変わらなくても・・・

→(10 年後、20 年後の彼らが変わるチャンスの種を播く)

→(たとえ 1 つでも将来に良い影響を与えられたら)

とにかく本を読みましよう。それに尽きる

→(インプットが無いアウトプットは空虚)

→(1 日 15 分でいい。本を読む習慣が、人生を豊かにしてくれる。本を読むことの大切さについて実感を持って話すことで、読書をする生徒が育つ)

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

エラそうにたくさん書きましたが、これらはすべて自分が教わったことばかりです。

師匠に教えてもらったことや、尊敬する方の本から、基礎を学びました。

そして何より、一緒に働いている学校の諸先生方に、授業を見学させてもらって学びました。

講師の先生や初任の先生の授業から、また他教科の先生方の授業からも、多くの学びやインスピレーションをいただきました。

「言葉を削る」ことの大切さは、特に体育の先生から学ばせていただきました。

若い方の授業は、どんどん進化していきます。

前年とは別人のような授業になっていることが、よくあります。

残念ながら、学校現場は授業以外の雑多な仕事があまりにも多く、なかなか授業研究に時間を割けないのが現状です。

それでも、地道に PDCA を回して、昨日より今日、今日より明日、と授業改善を重ねている先生が数多くいらっしゃいます。

これからもたくさんの実践に触れ、自分の授業を良くしていきたいと考えています。

ご縁をいただいたすべての方に感謝しております。

今後ともどうぞご指導のほど、よろしくお願いします。

2025 年 1 月 31 日

山下 広樹 拝

連絡先: ☎665-0871 宝塚市中山五月台 1 丁目 12 番 1 号

兵庫県立宝塚東高等学校

Email: piroriyama@yahoo.co.jp

